女子高生の犬（冒頭）

みちすすき

○市役所・事務室

ＰＣに向かい仕事をする職員たち。
段ボールを抱えた原（62）が入口につっかかりながら入ってくる。同僚の平須賀（38）、顔を上げ

平須賀「あ、それ会議室です」
原　「え、あっはい（戻ろうとしてまたつっかかる）」
職員Ａ「原さーん、三階トイレの蛍光灯、切れてたんだけど」
原　「（つっかかりながら）あ、はい」

×　×　×

デスクのＰＣで所在なく天気予報を眺める原。
時計が六時を指しチャイムが鳴る。
原　「（ぼそぼそと）お先失礼します（出ていく）」
書類仕事をしている平須賀と若手の金田（25）。
金　田「原さん、いつも早いっすね」
平須賀「やることないからね」
金　田「でもプライベートの時間充実してんの、いいなあ」
平須賀「（ふっと笑い）家ではやること、あんのかね」

○原の自宅（夜）

原、マンションの一室の鍵を開け中に入る。
暗い廊下にリビングからの明かり。足元に目を落とすと、ブレザーの制服にベルトの首輪をつけて四つん這いになったほのか（17）が原を見ている。

○同・リビングダイニング（夜）

原、荷物を置き台所へ。流し横に洗浄済みの食器、冷蔵庫を開けると中にラップされた豚キムチ。
棚から個包装されたもなかを出し、袋を開ける。足元に寄ってきたほのかの頭をそっとなでて口元に近づけると、ほのかがもなかに食いつく。
食べ終えたほのか、方向転換して手を棚にぶつけ

ほのか「いっ……！」

原、無表情にじっとほのかを見つめる。

ほのか「（その目を見返しながら）……わん」

冒頭終